令和６年度第２回七尾市総合教育会議　議事録

【日　時】令和７年２月２８日（金）１６時から１６時５０分まで
【場　所】七尾市役所５階　災害対策本部室
【構成員】七尾市長　茶谷　義隆、教育長　八崎　和美、教育長職務代理者　寺岡　卓子
　　教育委員会委員　大森　重宜、山田　理平、石坂　淳
【事務局ほか職員】
企画振興部長　楠　利勝、教育部長　奥村　義彦、教育部次長　善端　直
企画政策課長　板坂　繁、教育総務課長　観音　和繁、学校教育課長　奥原　真弥、
企画政策課課長補佐　橋本　恵子、教育総務課課長補佐　小原　真紀子、
企画政策課主事　堂脇　瑞稀　（スポーツ・文化課長　見里　博之　欠席）
【議事】
１　開会
２　協議　（１）令和７年度教育行政の諸課題について
３　閉会

【議事の経過】
１　開会
市長挨拶

２　協議
（１）令和７年度教育行政の諸課題について（奥村教育部長説明）

茶谷市長
今、事務局から説明があった復旧復興の状況について、委員の皆様方からご質問やご意見をいただきたい。
寺岡委員
七尾城の現状や復興の見通しについてお聞きしたい。
善端教育部次長
七尾城の被災状況として、石垣の崩落、平地や石垣がある斜面の亀裂、石垣の膨らみといった大きく 3 つの被災状況に分かれる。本丸から三の丸までの中心部の被災箇所は、30 箇所ほどあった。発災当初、本丸への登山は禁止していたが、七尾城に一刻も早く登っていただきたいという思いもあり、本丸駐車場から本丸までの危険箇所 2 箇所をネットで覆う応急措置をとった。ふもとからはまだ登れないが、本丸駐車場から本丸までは昨年の 12 月に登れるようになった。
今後の復旧について、専門家、文化庁、県と相談しながら、今年度中には復旧計画を作成

する予定。まず沿道に面した遺構を中心に、七尾城を訪れた方に見てもらえるような復旧をしていきたいと考えている。具体的には、崩れた石垣をまず中心に復旧していく。ふもとからもできるだけ早く登れるように今取り組んでいる。

茶谷市長

復旧過程など、今しか見れないような場所を、例えば写真にとってパネル展示するといった見せ方は考えているか。

善端教育部次長

石垣が崩れる前は正面の積んである面しか見えなかったが、崩れたことによって、後ろの方も見えるようになった。そういったものも写真に撮り、見ていただけるようにしたい。登山口駐車場には発災時の写真を飾っている。今後、発災時の写真とともに、修理過程もパネル状にして、皆様にも見ていただけるようにしたい。

大森委員

ＳＮＳでの発信が一番見てもらえると思う。七尾城に非常に興味がある方、全国から見に来ている方、七尾のために頑張りたいという方がいらっしゃる。メディア活用することで、より多くの人に見ていただけると思うので、検討いただきたい。

山田委員

教育委員会の施設ではないもしれないが、和倉のテニスコートの復旧状況が分かればご説明いただきたい。

茶谷市長

令和 7 年度改修の予算は立てている。サッカーグラウンドの方は護岸をまず直さないといけない。護岸は農水省の管轄で、今、行っている護岸の工事が終了次第、グラウンドの復旧にあたる。テニスコートは、今年の夏から秋にかけて改修する予定。

奥村教育部長

和倉温泉運動公園多目的グラウンドの復旧工事については、令和 7 年 7 月から令和 9 年 3 月までかかる見通し。開館予定時期は、令和 9 年の 4 月からとなっている。

大森委員

施設をできるだけ早く改修していくということだが、改修された施設の利用者増加に向けた取組が大切だと思う。復興復旧できたことをアピールするイベント的なものを考えればどうか。スポーツ施設であれば有名な選手に来てもらうというものもあるが、それ以外に、この施設を利用して何をするかということが大切。これは部活動の活性化にもつながることで、この施設を使った新しい部活のあり方を考えるといったこともやっていけばどうか。国は、「これを使って何をするのか」ということに、お金をつけるような時代になったと思う。施設が直ったときに何をするのか、個々の施設について今から考えておかないといけない。競技団体や協会といったところと方向性を合わせて、進める準備をしておかなきゃいけないと思う。

八崎教育長

おっしゃる通り、改修して終わりではなくて、どう使っていくか、さらに言えば、利用者をどう増やしていくかということが大切。大森委員が言われた、復旧できたというアピールを利用者増加につなげていくというのは非常に素晴らしいと思った。今、長期的に使えるような修理をしているので、そこをアピールしていき、利用者を増やしていくというアイデアはいいと思った。

茶谷市長

今、令和7年度の予算を編成したところだが、演劇堂においては復興記念ということで、「まつとおね」や「肝っ玉おっ母と子供たち」というような演目もある。復興を記念するような大会という位置づけで大会を計画していくのも一つだし、既存の大会をもう少しバージョンアップして多くの人に注目していただくというのも一つだと思う。様々な方法があると思うので、市でもしっかりと検討していきたいと思う。

石坂委員

保護者目線で聞きたいことがある。この一年間、施設、体育館が使えないということで、それぞれのクラブ活動で、保護者の方々がすごく苦労されたとお聞きしている。復旧の見通しが立っているのはすごくありがたいが、一部の方からは、もう少し小中学生の部活動の場所などについて保護者にヒアリングをし、どういうことで困ったのかというのを聞いてほしかったという意見もあった。今後どの施設が使えるようになるという情報があれば、練習場所確保のやりくりもしやすかったと思う。場所、時間が限られた中で練習場を確保し練習していると聞いている。もう少しクラブの講師や保護者、代表の方から話を聞けたらよかったのではと思う。また、先ほど大森委員がおっしゃった、復旧後の利用促進ができればいいと意見に対して、私もその通りだと思う。

茶谷市長

クラブ活動、学校関係の要望を聞いたり、アンケートを取ったり、市が施設の情報を流したりということに対してはどうか。

八崎教育長

おっしゃる通り、クラブ活動でいろんな場所を回って、非常に苦労しているというお話はいくつか入ってきた。ただ、もう少し広げて、聞く機会を設けるべきだった。

観音教育総務課長

学校の地域開放をしている施設の使用可否については、ホームページ等で周知していた。

奥村教育部長

公共施設も、ホームページでそれぞれ開館、休館しているという情報発信はしている。

大森委員

学校施設の復旧が皆様のご尽力で早々に進んでいると思うが、東日本大震災の報告書に、子どもたちの心が壊れているというようなことがあった。見た目は大丈夫そうに見えて、心が傷ついているということが、実際に起こっていると思う。子どもたちを先生方が細

やかに見ていただいていることも大事だが、もう１つ踏み込んで何かできないか。東日本の時の反省を参考にして、学校現場で何ができるかということをもう１回、考えるべきではないか。東日本大震災から未だに十何年経っても心の傷は残っている。ものだけではなく、人の心のことについても、もう１回立ち返って考えていただければと思う。

八崎教育長

まだ心が回復していないという前提で子どもたちを見ていくということは、教職員に対して繰り返し話をしている。震災前から行っていた全員面談やカウンセラーとの面談も、間隔を短くするなど、子どもたちが話せる場、子どもたちの心の変化に気づけるようなことを行っているところだが、大森委員が言われたとおり、油断せず、家庭と連携していくことが大切と感じた。

奥原学校教育課長

発災当初から、心のケア研修ということで、各先生方の研修や、各学校へのスクールカウンセラーの派遣日数を増やして、子どもたちの全員面談を複数回している。長期的に見ていく必要があるので、来年度も継続して行っていく。家庭との連携ということも視野において、学校に周知していきたい。

大森委員

奥能登の小学校では、体力運動能力テストのシャトルランが、平均値の 60%しかできなかった。たまたまその学校がそうだっただけかもしれないが、これは体力の問題ではなくやる気の問題で、下向きがちになっていると考えられる。奥能登と七尾とはまた違うかもしれないが、やる気が低くなっているということは、全てに通じることだと思う。

施設を直したからには、何かしら楽しいことがないといけない。子どもの生きる力を醸成するためには、そういうことが必要だと思うので、いろんな視点から子どもたちを見つめていただきたい。

茶谷市長

学校の関係で、心のケアなどの問題について把握している部分はあるか。

奥原学校教育課長

最近でも地震あったりすると、そういった拍子に恐怖を思い出すという子どもたちがいるということも、よく学校から聞いている。

八崎教育長

11 月 26 日に大きな地震があったときに欠席した子どもが 4 人いた。

茶谷市長

阪神淡路大震災の当時、大阪にいたが、震災後、半年、1 年後ぐらいに、フラッシュバックして、恐怖に怯えるような、そういう子どもたちが結構いたし、大人でもやる気をなくしている人がいた。絶望の中、お亡くなりになる方もいた。そういう意味では今は心のケアに関してはすごく慎重に対応していただいていると思っている。当時もやはり心の復興をキーワードにしていろんな取り組みを行ったと伺った。たまたまその時は音楽のコ

ンサートだったが、音楽、文化、スポーツといったものが子どもたちの心の復興には非常に大事だと思うし、それを実現するためにも、施設が一日も早く復旧することも大事だと思うので、そういうところを目指しながら今後対応していければと思う。

大森委員

創造的復興という言葉は、そこから作られた言葉らしい。創造的復興ができるようお願いしたい。

寺岡委員

１年たって状況は変わっている。発災直後は、避難場所や避難時の持ち物について、家庭で話をしたという声をよく聞いたが今は聞かなくなった。それではだめで、定期的に家庭や学校や会社で防災について話をしてアップデートする日を設けるべきだと思う。

石坂委員

親の立場として、子どもが学校に行きたくないといった言葉が一番グサッとくる。親は、安心して子どもが学校に行っているという上で、一生懸命仕事ができたりすると思う。子どもの心のケアに焦点が行きがちだとは思うが、子どもたちの一番近くで、現場で接する先生方の心の問題も大切。心身ともに健康な状態で子どもたち接してほしい。この地震で子どもたちの心だけでなく、大人も繊細になっている部分はあると思う。先生方や学校現場の方全体の変化に気づけるようにしてほしいと思う。

山田委員

ハード面での予算が大きいと思うが、並行してソフト面でも予算付けをしていくべき。先ほど大森先生言われたような形で並行して進めていくのは一番いいと思う。今、学校のクラブ活動が、地域移行期間であるというのはよく聞かれるが、そういった中での保護者や指導者の負担が大きい。スポーツの振興といった形から見れば、そういったところに予算付けをして、その保護者を確保するといった方でも必要ではないかと思う。

茶谷市長

たくさんのご意見いただいたが、整理して今後につなげていきたいと思う。

３　閉会